

上似平遺跡から出土した旧石器文化遺物の 黒曜石原材産地分析についての補足説明

The archaeological supplement as the results by XRF analysis
in obsidian remains from Kamiitaira site

山原 敏朗[※]

Toshiro YAMAHARA

はじめに

今回、藁科哲男氏が分析された試料は帯広市泉町に所在する上似平遺跡から出土した後期旧石器文化遺物の一部である。この遺跡は帯広空港の南側に分布する古砂丘群の中の一つに立地しており、考古学愛好家であった故・佐々木茂氏によって発見された。これまでに2度の発掘調査が行われているが（明石・後藤 1978, 佐藤・北沢 1987）、分析された試料は昭和 52 年に行われた第一次発掘調査の際、「A ブロック」と呼称された遺物集中域から出土した遺物である。A ブロックは細石刃を主体とする石器群で、筆者は本資料の再整理を数年来断続的に行ってきた。その過程で、ここで使用されている黒曜石の一部には十勝三股産以外のものが含まれているのではないかと予想し、機会があれば原材産地分析を行いたいと考えていたが、幸運にも藁科氏のご協力を得ることができた。私自身としては、何よりもまず今回の分析を快くご承諾下さった藁科氏に厚く謝意を申し上げたい。

分析試料の選択について

試料は以下のような作業を行った後、提出したものである。

まず、色調から灰色で不透明、透明または半透明、暗赤褐色混じり、明赤褐色混じりに大別し、それぞれを色調、透明度、夾雑物、流理構造から、さらに細別分類した。次に、細別分類ごとに遺物の折面どうしの接合作業を行い、その後で剥離面接合を行った。この過程でそれぞれの石質別分類内での接合だけでなく、類似する石質どうしの接合作業も断続的に何度か繰り返し行い、細別分類の再整理を試みた。その結果、少量の帰属不明資料はあるものの、ほとんどの資料は 13 の石質に分けることができた。なお、石質別分類は石器及び大きさが 1 cm 以上の剥片を対象としており、碎片は分類対象から外している。

試料の提出にあたっては石質別に分けた 13 群のそれぞれから複数提出するように試みた。ただし、他の分析の都合上 obs 7 だけは 1 点のみとせざるを得なかった。また、接合資料のある石質においては可能な限り接合資料に含まれるものを選択した（表 1）。

提出した試料はこのような経緯によるものであるため、無作為抽出により提出された試料の分析結果とは意味合いが異なることを留意していただきたい。

※帯広百年記念館学芸員

分析結果について

分析の結果、提出試料は十勝三股産と赤石山産（白滝村にある産地の一つ）の2産地のものと判定された。接合資料や石質別分類の状況とも合わせると、Aブロックで使用されている黒曜石はこれら2産地の黒曜石のみで構成されている可能性が非常に高いと思われる。

提出試料だけでみると、2つの産地の割合はほぼ1:1であり、石質別にみた割合においてもほぼ同様といえる（図1）。もっとも、提出試料は石質別分類を考慮して選択したものであるため両者が同じ傾向を示すのは当然であろう。

次に、それぞれの石質に帰属する細石刃数に換算してみると、十勝三股産と赤石山産の割合は約1:1.5となる。これは細石刃の帰属数が多い石質に赤石山産とされたものが多い傾向にあるためである。また、剥片を含めた帰属総数で換算すると両者は約1:2.2となり、細石刃だけでみた割合より両者の開きは大きくなる。これは obs 13 とした石質に含まれる資料の中に細石刃核を大きく変形させたものがあり（山原 2000）、その時に生じた剥片が多量に存在するためである。

以上のように、本石器群は石質数からみれば十勝三股産と赤石山産の黒曜石はほぼ同量といえるが、各石質に帰属する細石刃や剥片の数に換算すると、赤石山産の黒曜石が十勝三股産のそれより明らかに多いと理解することができる。遺跡内で製作された細石刃がすべてそのまま残されているとはいえないものの、細石刃の帰属数が多い石質は遺跡内において、より高い頻度で細石刃製作に使用された石質であるといえよう。いいかえれば、ここでは距離的に近い黒曜石産地である十勝三股産よりも距離的に遠い赤石山（白滝）産黒曜石を消費する方が多かったと推測され、地理的要因を超えた石材供給の環境が当該期においても存在したと理解される。

おわりに

今回、肉眼による石質別分類と蛍光 X 線分析の結果を併用したことにより、一石器群内における黒曜石の産地別構成割合の精度は少なくとも従来のものより高められたといえる。石質別分類は肉眼による識別ではあるが、蛍光 X 線分析の結果との矛盾がなかったことや接合資料の成功率からみる限り、精度はかなり高いと考えている。それゆえ、すべての石質とはいえないものの、石質別を母岩別に換言してもよい資料群は多く得られたと思われる。また、母岩別の識別が成功したとはいえない石質においても+1~2母岩の誤差には入るものと推測され、母岩別分析の視点から得られる結果に大きな誤認が生じることはないと思われる。母岩ごとの製作、使用状況を産地との関係をふまえて理解することが可能となったことも成果の一つである。

引用文献

- 明石博志・後藤聡明（1978）『上似平遺跡』帯広市教育委員会
佐藤訓敏・北沢 実（1987）『帯広・上似平遺跡』2 帯広市教育委員会
山原敏朗（2000）「十勝平野における細石刃核の変形について」『北海道旧石器文化研究』第5号

表1. 帯広市上似平遺跡Aブロック出土遺物の黒曜石原産地分析試料一覧

試料No.	遺物名	遺物番号	石質 No.	判定結果	帰属遺物の内容	備考
1	細石刃	OK. E 12-924	obs 1	十勝三股	細石刃18点	接合10点中の1点
2	細石刃	OK. E 12-1417	obs 1	十勝三股		
3	細石刃	OK. E 12-1189	obs 2	十勝三股	細石刃9点	接合2点中の1点
4	細石刃	OK. E 12-1662	obs 2	十勝三股		
5	細石刃	OK. E 12-904	obs 3	赤石山	細石刃24点	
6	細石刃	OK. E 12-1664	obs 3	赤石山		
7	細石刃	OK. E 12-s523	obs 4	十勝三股	細石刃3点	
8	細石刃	OK. E 13-s407	obs 4	十勝三股		
9	細石刃	OK. E 12-1176	obs 5	十勝三股	細石刃5点	
10	細石刃	OK. E 12-918	obs 5	十勝三股		
11	細石刃	OK. E 12-920	obs 6	十勝三股	細石刃15点+剥片1点	接合3点中の1点
12	細石刃	OK. E 12-906	obs 6	十勝三股		
13	細石刃	OK. E 12-247	obs 7	十勝三股	細石刃3点	
14	細石刃	OK. E 12-693	obs 8	赤石山	細石刃31点	接合14点中の1点
15	細石刃	OK. E 12-694	obs 8	赤石山		接合5点中の1点
16	細石刃	OK. E 12-857	obs 9	赤石山	細石刃21点+剥片17点	接合9点中の1点
17	細石刃	OK. E 12-1400	obs 9	赤石山		
18	剥片	OK. E 12-1537	obs 9	赤石山		細石刃核の調整剥片
19	細石刃	OK. E 12-1453	obs 10	十勝三股	細石刃88点+剥片7点	接合11点中の1点
20	細石刃	OK. E 12-1679	obs 10	十勝三股		接合7点中の1点
21	細石刃	OK. E 12-884	obs 10	十勝三股		
22	細石刃	OK. E 12-不明	obs 11	赤石山	細石刃41点	接合6点中の1点
23	細石刃	OK. E 12-983	obs 11	赤石山		
24	細石刃	OK. E 12-1435	obs 12	赤石山	細石刃7点	
25	細石刃	OK. E 12-159	obs 12	赤石山		
26	剥片	OK. E 13-219	obs 13	赤石山	細石刃91点+細石刃核 接合資料及び同一母岩 非接合剥片96点	細石刃核接合資料中の1点
27	細石刃	OK. E 13-907	obs 13	赤石山		接合13点中の1点
28	細石刃	OK. E 13-973	obs 13	赤石山		
29	細石刃	OK. E 13-1351	obs 13	赤石山		
30	細石刃	OK. E 13-1408	obs 13	赤石山		

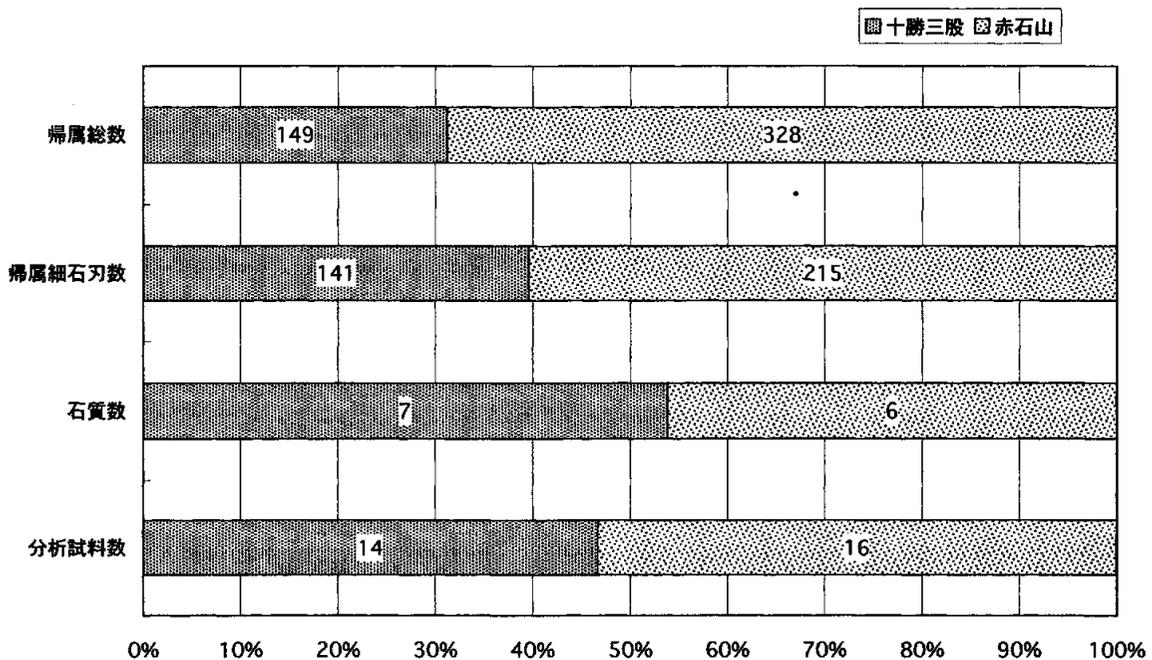


図1. 十勝三股産黒曜石と赤石山産黒曜石の割合



写真 1. 分析試料 (左上より試料 No. 順)